

平成30年度 自己評価・学校関係者評価

I 自己評価

岐阜県立岐阜北高等学校

学校番号

2

<p>1 学校教育目標</p>	<p>1 知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する。 2 確かな学力を身に付けさせ、創造的思考力と主体的実行力とを併せ持つ生徒を育成する。 3 品性がありグローバルな視野と地域社会に貢献できるたくましい実践力とを兼ね備えた人間性豊かな生徒を育成する。 4 倫理観や規範意識に基づく社会性を育むとともに、他者を思いやる心に富む生徒を育成する。 5 健康維持や体力づくりを推進し、自他の生命を尊重できる生徒を育成する。</p>
<p>2 現状の分析</p>	<p>○誠実で礼儀正しく、スマートな生徒が多い。頭髪・服装・行動ともに突出する生徒は少ない。人間関係も落ち着いている。 ○部活動への加入率は、1年生97%、全体で約90%と、文武両道を目指す生徒が多い。ここ数年の進学実績は、国公立大学を中心に堅実な成果（昨年度は国公立合格者220名）をあげている。東京大学に2名（現役2名は12年ぶりの快挙）、京都大学に2名、大阪大学に10名が合格するなど難関国立大学にも健闘した。 ○生徒、保護者を対象とするアンケート（平成29年7月実施）では、本校の教育方針・学校経営、家庭との連携、教職員、学習指導、生徒指導、進路指導、健康管理・安全指導、学校行事等の各分野において、生徒は39項目中全て、保護者は40項目中31項目において、80%以上の肯定的な評価を得ている。 ○県教育委員会「魅力ある高校づくり推進事業（平成28年度～30年度）」研究指定の2年次として、各職員が全国の先進的なアクティブ・ラーニングの取組を視察し、本校でも実施可能な取組について研究を行った。各教科・科目において、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開や、コミュニケーション能力の伸長を意識した言語活動などを積極的に取り入れて、授業改善を推進している。 ○上記に加え、平成29年度より県教育委員会「進学指導重点校事業」の指定を受け、高い志を持つ生徒の早い段階からの継続的な育成に努めるとともに、平成32年度からの大学入試改革を踏まえた進学指導体制の構築が求められる。 ▲交通安全指導については、年間を通して定期的実施しているが、自転車通学の生徒が多く、登下校時の自転車事故を完全に防ぐことが難しい状況にある。今後も細心の注意を払って指導する必要がある。</p>
<p>3 学校の抱える課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・県教育委員会研究指定（カリキュラム開発事業・進学指導重点校事業）の推進 ・本校進学実績の一つの指標となっている名古屋大学等、難関国立大学への合格者数の増大 ・特別活動、学習活動等において、生徒が積極的に地域社会と関わる教育活動の推進 ・教員間の情報共有、連携による組織的な教育相談体制の構築 ・グローバル精神を育む国際交流活動の推進（オーストラリアのマンズフィールド高校との姉妹校提携） ・学校ホームページ、一斉配信メール、各種メディアを積極的に活用した広報活動の推進 ・AL型授業、探究活動に適したICT環境の整備 ・校内防災体制の不断の見直し
<p>4 今年度の具体的な重点目標</p>	<p>◇県教育委員会研究指定（カリキュラム開発事業・進学指導重点校事業）の推進</p> <p>1 カリキュラム開発事業</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業改善 <ul style="list-style-type: none"> ・各教科単位でAL型授業スタイルの確立を行い、指導計画に反映させる。 ・学びの深化を測る評価方法を研究する。 (2) 進学重視型単位制カリキュラムの研究と開発 <ul style="list-style-type: none"> ・より高い進学目標に対応した授業展開や探究的な学びを可能にする進学重視型単位制カリキュラムの開発を行う。（平成31年度入学生の教育課程の編成） <p>2 進学指導重点校事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高い志を持ち、難関大学を目指す姿勢・学習を継続していくことのできる生徒の育成を目指し、大学入試改革に対応した新しい進路指導体制を構築する。

年 度 目 標			年 度 末 評 価			
5 評価項目 領域・分野	6 重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	7 達成度の判断・判定基準 あるいは評価指標	8 取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	9 評価 A・B・C・D	10 成果○と課題▲	11 総合 評価
学習指導	<p>①進学重視型単位制カリキュラムの研究と開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単位制改編への目的の共通理解 ・本校の単位制教育課程のコンセプトの明確化 ・教育課程の編成 ・主体的・探究的学びの研究 <p>②生徒が中学校へ出向き、中学生に学習指導や進路のアドバイスを行うボランティア（スタディサポーター）を実施する。</p>	<p>①カリキュラム開発部会で活発な意見交流が行われたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科会において単位制教育課程のコンセプトに適した案を創意工夫して作り出すことができたか。 ・カリキュラム編成の会議において改編の目的に叶った編成ができたか。 <p>②スタディサポーターの学習ボランティアに積極的に参加し積極的に活動することができたか。</p>	<p>①あらゆる可能性を案として出し、多角的面から議論することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既存の科目にとらわれないカリキュラム編成ができた。 <p>②第1回は2校（本校生徒23名、中学生52名参加）で実施し、第2回は4校（本校生徒18名、中学生51名参加）で実施した。</p>	A A	<p>○他校の取り組みなども参考にしながらも、本校独自の内容なども盛り込むことができた。</p> <p>○職員の意識改革につながることもあった。</p> <p>▲一部の探究的な学びについては、計画中の部分もあり、今後も議論を深める必要がある。</p> <p>○実施後のアンケートでは、高校生、中学生ともの有益な時間を過ごすことができた大変好評であった。今後も継続していきたいとの希望が寄せられた。</p>	A
進路指導	<p>①2年生を対象として名古屋大学大学院国際理解教育プログラム（E I U P）との交流と大学見学を実施し、大学への関心を喚起すると共に、探究学習を行う。</p> <p>②1年生を対象として学部系統別説明会を実施し、早期の目標設定を目指す。</p> <p>③1年生を対象として本校卒業生の難関大学進学者による大学説明会を実施。</p> <p>④東京大学研究室見学や名古屋大学出前授業（年4回）を実施し、高い進路志望の醸成に繋げる。</p> <p>⑤入試改革に向けて1年生保護者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に対し新入試ガイダンスを実施 ・「活動記録」の導入 	<p>①参加者アンケートや感想等により、大学への興味関心が高まったかどうか。</p> <p>②参加者アンケートや進路志望調査により進路志望が具体化したかどうか。</p> <p>③④生徒の活動記録等や参加者アンケートにより、進路意識の高揚がみられたかどうか。</p> <p>⑤参加者アンケートや活動記録により、新入試への理解が深まったかどうか。</p>	<p>①考察したことをプレゼンテーションにまとめ留学生（大学院生）に評価してもらうことで、充実した探究学習ができた。また、実際に大学を訪れることにより、大学への関心が高まった。</p> <p>②2系統の話聞くことにより、進路選択が具体化し文理選択の参考になった。</p> <p>③活動記録を見ると、概ね好評であった。ただ大学受験への意識の高まりは見られたが、難関大学志望者の増加は見られなかった。</p> <p>④実際に大学での研究の一端に触れることにより進路意識の高揚に繋がった。</p> <p>⑤保護者対象と生徒対象の2回のガイダンスを実施し、新入試制度の概要を説明した。</p>	A A B A B	<p>○全学年において、様々な企画を通して進路意識や学習意欲の向上を図ることができた。</p> <p>○実際に大学の研究に触れることにより、大学での勉強に興味関心を深めることができた。</p> <p>▲入試改革の影響で、志望が安全志向となりつつあり、高い志望を持つ層を形成するまでには至っていない。</p> <p>▲新入試制度の概要は説明できたが、大学側の対応がまだ不明な点が多く、具体的な対策まではできなかった。</p>	A

生徒指導	<p>①北高生としての誇りを持たせ、社会のリーダーとしてふさわしい人間形成を図る。(イエローカードを活用した指導)</p> <p>②命を大切にする教育を進め、薬物、防災や交通安全教育を推進する。情報社会への理解を深め、情報を正しく運用する能力を育成する。県のネットパトロールとの連携を図る。</p> <p>③対話を通して信頼関係を構築する教育相談に努め、一人一人の自己有用感を高める。検査や調査の分析結果から現状を把握する。</p>	<p>①授業規律の確立、場に応じた挨拶、端整な身だしなみができているか。</p> <p>②交通事故、交通マナー違反、情報モラル違反の件数が前年度に比べて、減少したか。</p> <p>③校内、保護者、関係機関との連携により、生徒の援助が適切に行われたか。必要な情報や資料を生徒や保護者に適切に提供できたか。</p>	<p>①毎月4回の身だしなみ指導や生活委員・MSLによる挨拶運動、授業開始時の身だしなみチェックにより有効な指導ができた。</p> <p>②校外交通指導、ハザードマップの作成、指導部通信(Kashiwa)、一宮特別支援学校教諭 則竹崇智さんによる生活安全講話によって啓蒙活動を行った。</p> <p>③支援が必要な生徒については、学年会、教育相談係、部顧問、教科担任などで情報を共有し、組織対応で取り組むことができた。特に支援が必要な生徒は、スクールカウンセラーによる相談や、スペシャルサポート指導、外部機関による相談を受け、専門的な見地からの支援を行った。</p>	A B A	<p>○大きな問題行動はなく、服装の乱れも気になるほどではない、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っている。情報モラル違反については、軽微な違反が発生しているので、今後も注意していきたい。</p> <p>○不審者情報など生徒へ伝えるべき情報を、指導部通信(Kashiwa)を出し、素早くクラスへ発信し、注意喚起をすることができた。</p> <p>▲自転車による交通事故は、7月に9件発生、11月は、0件と月によって差があり、件数だけ見ると昨年と比較してもあまり変わっていない。大きなケガがなかったのが幸いであるが、命の大切さ、マナーの重要性を今後も継続指導していく必要がある。</p> <p>▲教育相談では、今後も支援が必要な生徒を早期に発見し、連携して対処に努めていく必要がある。</p>	A
特別活動	<p>①自発的かつ自治的な活動、チームワークを大切にした指導によって、支え合い伸ばし合う関係性の形成、相互理解と協調により物事を遂行していく姿勢を育成する。</p> <p>②学校行事および部活動等の公開や、学校ホームページの随時更新を行う。</p>	<p>①生徒が校外行事やボランティア活動に自主的に参加して、満足感・達成感を得られたか。</p> <p>②保護者や地域の方々が、各種行事に参加していただけたか。また、教育活動に対する理解は得られたか。</p>	<p>①高橋尚子杯岐阜清流ハーフマラソン沿道応援や、ボランティア清掃活動、岐阜希望が丘特別支援学校訪問など、生徒が地域社会の一員として貢献し、社会生活における規範意識を高めることができた。</p> <p>②生徒会活動や部活動において、北高生の一員として積極的・自主的に活動しており、それに対して地域・保護者から高い評価を得た。</p>	A B	<p>○生徒会活動や部活動における生徒同士の協力により、コミュニケーション能力が育成された。また、目標を達成するための強い意志と、広い視野を身に付けることができた。</p> <p>▲今後の課題として、学校行事の精選、課外活動時間の効率化など、生徒個々に対応した指導法を考えていきたい。</p>	A
保健管理	<p>①定期健康診断や保健行事等を通じて健康管理についての意識を高める。</p> <p>②環境衛生活動の充実</p> <p>③事故や感染症対策の充実(職員の危機管理意識の向上)</p>	<p>①定期健康診断の事後処置に努め、受診率の向上に繋がったか。保健行事を通じて生徒の変容に繋がったか。</p> <p>②学校薬剤師と連携して、環境衛生の定期検査と日常点検の結果を、よりよい環境づくりに繋げることができたか。</p> <p>③事故発生時の救急体制や、食物アレルギー対応の徹底を図るとともに、情報を共有して事故防止に努めることができたか。けがや感染</p>	<p>①定期健康診断の事後指導は、特に所見者が多い歯科と視力に重点を置いた。その結果、12月現在の受診率は、歯科が64.1%、視力が62.1%で昨年度比較ではやや低いので、再度受診勧告をしたい。生徒救急法講習会、熱中症予防講習会、保健講話等の健康啓発活動を積極的に行った。その都度、生徒たちが自他の命について考える姿や言動がみられた。</p> <p>②学校薬剤師との連携を強化し、環境衛生活動の指導助言を受けて、管理職や関係職員と連携し、できる限り不十分な点を改善することができた。</p>	A A	<p>○学校保健計画や保健室経営計画に基づいて、常に課題を持ちながら意欲的に保健管理や保健指導に取り組むことができた。</p> <p>○環境衛生活動の更なる向上ができ、生徒委員会活動の活性化も図ることができた。その成果もあって『学校環境衛生活動優良校』の表彰を受けた。</p> <p>▲職員の危機管理意識の向上には研修・啓発を繰り返し、マンネリ化しないことが重要。今年度は食物アレルギー対応(エピペン)のシミュレーション講習が実施できなかった</p>	A

		症の拡大を防ぐために早期対応や予防の意識を高めることができたか。	③職員の危機管理意識の向上を図るための研修、啓発、タイムリーな情報提供を積極的に行った。けがや感染症予防についても同様に行った。その結果、体育的行事でのけがは昨年度より少なく、重傷者もいなかった。	B	ので、次年度は実施したい。	
安全管理	①校内安全点検を定期的実施し速やかに改善を図る。 ②災害事故発生等の緊急時対応の流れを確認するとともに、命を守る訓練の充実を図る。	①定期的に安全点検を実施することができたか。また、結果を受けて修繕が速やかに行えたか。 ②命を守る訓練の実施を効果的に実施することができたか。	①定期的に校内安全点検の実施し、安全を確保することができた。修繕は可能な限り速やかに対応できた。 ②想定異なる命を守る訓練を年3回実施することができた。	A B	○校内安全点検や命を守る訓練の内容をさらに充実させることで、快適で安全な学習環境の確保と防災意識の高揚を図ることができた。 ○非常変災時の非常食（3日分）について検討し、整備することができた。	A
国際交流	①国際交流の新たな高校との姉妹校提携 ②国際交流の推進（今年度は受け入れ校）	①適切に姉妹校提携がなされたか。 ②留学生を学校として、ホストファミリーとして安全受け入れ、有意義に国際交流がなされたか。	①9月29日から10月6日まで26名のオーストラリア、マンスフィールド校の留学生、引率の先生2名を期間中、無事、受け入れることができた。全校生徒による歓迎式典や、姉妹校提携式など行い、国際交流がなされた。	A	○ホストファミリーの方の協力もあり、新しい高校と姉妹校としてのスタートを切ることができた。双方とも、有意義な国際交流がなされた。	A
カリキュラム開発	①各教科でアクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善を行う ・各教科で研究授業を行う。 ・全職員による公開授業の実施 ②アクティブ・ラーニング実現のための職員研修の実施 ③探究学習に向けた総合的な学習の時間の活用方法の検討 ④単位制カリキュラムの作成	①研究授業、公開授業の実施状況はどうか、生徒による授業アンケートによる評価する。 ②職員研修の実施実績と職員へのアンケート調査により評価する。 ③生徒へのアンケート調査により評価する。 ④来年度以降の学校アンケート内で評価する。	①研究授業については各教科計画された通り実施でき、生徒による評価も得られた。しかし、全職員による公開授業については、日程の関係等により、すべての教員が実施できたわけではなかった。 ②講師を招き、2回の研修を実施した。職員からのアンケートから、意義のある研修であったと評価できる。 ③2年生が名古屋大学を訪問し、大学院生向けに英語でプレゼンテーションを実施した。参加生徒からは、多くの収穫があった感想が寄せられた。 ④進学型の単位制カリキュラムを作成した。充実した議論により、生徒の実態に合ったものができた。	B A A A	○次期学習指導要領を意識し、社会の変化、入試改革に対応するための取組を実施することができた。具体的にはアクティブ・ラーニングについての研修や、単位制導入、探求活動の実施である。 ▲次期指導要領を意識した取組が全員の職員の中に浸透しているとは言えない。	A

II 学校関係者評価 (平成31年1月16日実施)

- ・授業参観では、センター試験直前の時期であることもあり、3年生は、どのクラスも張り詰めた雰囲気の中、熱心に学習に取り組む姿が見られた。
- ・高校生は、感受性が強い時期である。今、求められる力は多様化しているので、外での社会的現象に生で触れることが大切である。有名大学だから行くのではなく、こういうことをやりたい、勉強したいから行くというように、体が震えるような感動、若者の感動が大切である。外国で自分のセンスを磨くなど、相手を知り、理解し、行動する経験を積む。知力、感性が有機的に発展していくことが、物事を解決する力となり、進路の動機づけにもなる。豊かな北高生に期待している。
- ・社会の変化は、10年スパンから3～5年スパンになってきている。このことを念頭に学校が教育を考えてくださっていることに感謝している。学校では、何とんでも現場の先生の魅力によるところが大きい。高校生ともなれば、徐々に親離れをしていく時期であるが、本校では、保護者は子供に、安心して手を放すよう言ってほしい。
- ・中学校に出向いて学習を支援するスタディサポーターの活動では、生徒が自ら考えて学ぶことができた。自己肯定感、達成感を得られるよいボランティア活動であった。
- ・本校は、進路集会なども適度実施されている。開かれた学校である。

12 来年度に向けての改善方策案

- ・「魅力ある高校づくり推進事業（次期学習指導要領を見据えたカリキュラム開発）」に取り組んだ3年間の成果を踏まえ、来年度からの進学重視型単位制カリキュラムを着実に実施するとともに、各教科で実践しているアクティブ・ラーニング型の授業改善や探究的な学習の研究を継続して推進する。
- ・「進学指導重点校事業」3年目に向けて、大学見学、出張講義、学部系統別進学説明会、教員研修等の各事業を検証し、生徒が3年間で段階的に進路意識の高揚を図るとともに、大学入試改革にも対応できる新しい進路指導体制を構築する。
- ・新規事業「地域共創フラッグシップハイスクール」に着手し、グローバルな視点を持って地域課題を発見、解決する探究的な学習を通して、高大接続を促進し、大学卒業後に地域創生などの様々な分野で活躍できるリーダーを育成する。
- ・学校情報の発信、ICT環境の整備、交通事故防止啓発活動を継続して推進する。